

2023年1月29日 賛美礼拝
マタイによる福音書 第6章5～15節
「神を呼ぶ～主の祈り①」

並木 裕忠

本日は「主の祈り」その最初の言葉「天の父よ」との言葉の説教をさせていただきます。西方教会には、三つの重要な信仰の言葉とされる「三要文(さんようもん)」と呼ばれる三つの大切な言葉があります。その一つが「主の祈り」です。古代の神学者、テルトゥリアヌスは「『主の祈り』は福音の要約である」と言います。ということは、私どもが、この「主の祈り」を学び、理解できたら、神の福音の真理、その救いの急所が分かったことになるということです。では、主イエスはどのようにして、この「主の祈り」を教えられたのでしょうか。マタイによる福音書 第6章7節で主イエスは「また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思いついでいる。」とおっしゃり、さらに8節から9節にかけて、主イエスは「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。だから、こう祈りなさい。」とおっしゃって、「主の祈り」を教えてくださいました。あなたに必要なものを主なる神はとっくにご存じなのだ。それだからこそ、何が最も必要なものなのか、心に刻むためにも、このように祈りなさいと「主の祈り」を教えてくださいました。古代の教会指導者である教父たちが書き残したもののなかで、「主の祈り」を日々の生活の中で繰り返し祈りなさいと勧めています。一日の内で「主の祈り」をその通り何度も祈るのです。そのようにして祈りの生活を整えなさいと言うのです。

「主の祈り」は、「天の父よ」と祈り始めます。主イエスはあなたがたも同じように「私のお父さん」と祈ってよいとおっしゃるのです。それは、私どもは既に神の子とされていますという信仰告白でもあります。ですから、「天の父よ」との言葉は、祈りを始める前の決まり文句ではないのです。感謝の最もすぐれたものが祈りであると言われていたことに従い、感謝を込めて、お父さまと呼ぶのです。

さて、福音書において、主の祈りが出てくるのは、マタイによる福音書の他に、ルカによる福音書があります。第11章1節以下です。ここでは、マタイによる福音書とは異なり、弟子たちの方から、祈りを教えてくださいよう求めています。なぜか、主イエスが祈っておられる姿を見たからです。主イエスが弟子たちの頼みを受けて与えて下さった祈りは、明らかに、ご自身の祈りに弟子たちを招き入れる祈りでした。「主の祈り」は、主イエスのように私どもも祈れるようにと、主イエスが与えて下さった祈りのお手本なのです。ですから、私どもは主なる神に祈ろうと思ったら、主の祈りをそのまま祈ればよいのです。ある方が大切な肉親の最期を看取りました。その方は悲しみに暮れ、何と祈ったらよいか分からない。祈りの言葉が出て来ない、もう祈れないと牧師に言ったそうです。すると、その牧師は、「主の祈り」なら祈れるでしょと答え、一緒に「主の祈り」を祈ったそうです。私どもは、どんな時も主イエスが教えてくれた「主の祈り」なら祈れるのです。主の祈りを祈ることから、私どもの信仰の祈りは始まるとも言えます。

2023年に入りました。未だに新型コロナウイルス感染が収まりません。一方、ロシアはウクライナ侵攻を止めません。連日、多くの方が亡くなり、被害は広がっています。来月にはウクライナ侵攻から一年になります。しかし、こんな中であっても、先月12月、私どもは、神の御子のご降誕、クリスマスをお祝いしました。コロナ禍の不安、恐れによっても、先行き不透明は世界情勢の中であっても、クリスマスの喜びと希望は、決して小さくなりませんでした。それはどんな時でも、父なる神と御子主イエスが私どもの近くにいてくださるからです。「天の父よ」と祈り始める「主の祈り」はその主の近さを私どもに再確認させてくれるのです。「天の父よ」と祈れることに、心から感謝しつつ、これからも「主の祈り」を祈ってまいりましょう。